



ブナセンターは通常(月)(火)休館。シルバーウィークは19～22日開館、23日休館とします。

<今月のご案内>

黒松内版
森林療法体験会

おさんぽの会

歌オブナ林のコース(往復約3キロ)を、季節の自然を楽しみながらゆったりと歩きます。五感をつかって、心も体もリフレッシュしましょう！

【日 程】 9月20日(日)

＜今後の予定＞

・10月18日(日)・11月15日(日)

【時 間】 10:00～12:00(目安です)

【集 合】 黒松内温泉ぶなの森 左側集合

【持ち物】 ウォーキングしやすい服装、靴、帽子、飲み物、虫よけ など

【参加料】 町民無料、町外参加者1組500円

【その他】 申込不要。雨天中止・小雨決行

調査の
お手伝い

歌オブナ林の シードトラップ設置

毎年秋に歌オブナ林で行っている「ブナの実調査」のための「シードトラップ」を設置しに行きます。ブナは豊作・凶作を数年サイクルで繰り返すことが知られており、毎年の結実量のデータを蓄積することがとても大切です。※笹藪をこぎます。

【日 程】 9月12日(土)

※予備日9月13日(日)

今年は豊作
になりそう
です！

【時 間】 9:00～12:00(目安です)

【集 合】 歌オブナ林駐車公園

【持ち物】 野外で活動できる服装、長靴、帽子、飲み物、虫よけ など

※笹藪をこぐので、穴が開いてもよい服装。

【その他】 申込不要。参加無料。雨天中止・小雨決行。花ごよみ調査も行います(参加自由)。

2028年の100周年に向けて 歌オブナ林の散策路の 一部補修に取り組みます

歌オブナ林は2028年10月22日に天然記念物指定100周年を迎えます。今年5月には100周年事業実行委員会が設立し、まずはロゴマークやポスターなどを作成する「広報部会」と歌オブナ林の散策路の補修に取り組む「散策路部会」が始動することとなりました。7月に散策路の補修に向けての事前調査が行われたので簡単に報告します。

歌オブナ林の散策路はいま

歌オブナ林の散策路をよく見ると、長年の歩行者の踏み固めにより、地面がカチカチになっている場所があります。とくに、通称「ぶなのき台」(右写真)では、地面からブナの根が浮き上がっているところも。こうなった根は、いずれ枯れていく可能性があります。また、木の階段が腐ってきている個所もあります。

歌オブナ林は、ブナ北限域を代表する貴重な原生林です。この森を後世に残し、今後も訪れる人にその魅力を知ってもらうためには、歩きやすさはもちろんですが、森にもともと生えている植物へのダメージを軽減するような散策路の整備が必要です。



ブナの根が露出している「ぶなのき台」

今後に向けて・・・

7月12日、北大博物館の春木雅寛先生(現在、黒松内生物多様性保全奨励事業の選考委員)に現地に来ていただき、まずは「ぶなのき台」のブナの根の露出具合を調査し、対策方法について議論を行いました。

歌オブナ林は国の天然記念物であるため、散策路の設置や補修には文化庁の許可が必要です。また、どのような補修を行うかを森林管理署などの関係機関と調整しつつ、今年の秋には、実行委員および一般参加者を交えての最初の補修作業を行う予定です。

根の露出具合の調査

発行所：黒松内町ブナセンター
〒048-0101 北海道寿都郡黒松内町字黒松内512-1
TEL 0136-72-4411 FAX 0136-72-4440
MAIL bunacent@host.or.jp HP <https://bunacent.host.jp>
FB <https://www.facebook.com/kuromatsunai.bunacent>

100周年に向けた活動については、特設
Facebook・Instagramに随時投稿するので
ぜひチェックしてくださいね！



【報告】歌才でタイムスリップ ―湿原からみえてくる4万年の歴史―

7月5日(日)にシュテファン・ホーテス先生（中央大学）による湿原に関する講演会と、現地を観察するガイドツアーが行われ、町内外から32名（うちツアー23名）が参加しました。

ホーテス先生らの新発見

歌才湿原の下流側にあった「下歌才湿原」が、道内最古となる約4万年前から形成されはじめたことがわかりました。



「歌才湿原」と「下歌才湿原」

歌才地区を通る国道5号沿いにある「歌才湿原」は、1990年代から本格的な調査が行われ、水位を保つなどの保全が行われてきました。2025年、ホーテス先生らが歌才地区で新たに地層調査・空中写真判別をおこなった結果、「下歌才湿原」の存在や、そのなりたちが見えてきました。この2つの湿原はとなり同士ですが、じつに対照的な運命を辿ってきました。

湿原のなりたち

歌才湿原
河川争奪※1や歌才川の扇状地※2により歌才川上流の流れが変化し、水がたまった。

人との歴史

排水溝が作られ農地化を試みるが、農地にはならず。

調査・保全に関する動き

2001年 環境省「重要湿地500」に選定
2015年 ナショナル・トラスト運動で買取
2023年 環境省「自然共生サイト」に認定

下歌才湿原

断層（西側が隆起・東側が沈降）により歌才川が西側に流れにくくなり、水がたまった。

1940年代後半から農地利用されたが、2000年以降から放棄。

知る人ぞ知る泥炭地で、保全はなされず。
1987年 阪口先生が地層調査(地下9.4m)
2025年 ホーテス先生らが地層調査(地下16m)

1989年に阪口豊先生（東京大）は、歌才地区の地下9.27mに約2万4千年前に形成された「泥炭層※3」があることを明らかにしました。2025年にホーテス先生らは、さらに深い地下14.2m付近に約4万2千年前の泥炭層を確認しました。泥炭層には、いくつかの粘土層がはさまっていることから、断層活動によって深い水域（湖沼）ができ、その後埋まりながら湿原になるという過程が繰り返されていたことがわかりました。

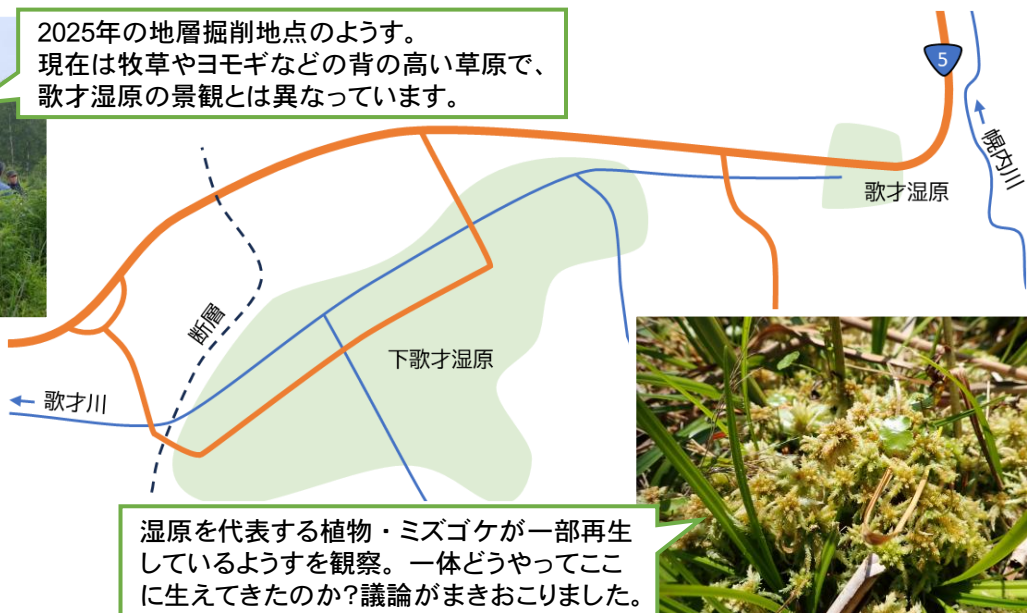
※1 河川争奪：かつて幌内川と歌才川はつながっていたが、ある時、別の川が幌内川の上流部分を奪い取り、今の幌内川となったという仮説。
※2 扇状地：上流から流れてきた土砂がたまって、小高い地形ができること。それにより歌才川上流部がせき止められたという仮説。
※3 泥炭層：ミズゴケなどの植物遺体が積み重なり地層となったもの。冷涼で湿った環境だと分解しづらいためできる。湿原があった証拠となる。

下歌才湿原はいま、どうなっている？（湿原ツアーで見られたこと）



2025年の地層掘削地点のようす。
現在は牧草やヨモギなどの背の高い草原で、歌才湿原の景観とは異なっています。

歌才地区の何気ない風景には、広大な湿原だった時代や、人の利用の歴史といった、見えない時間が刻まれていることを体感したツアーでした。



湿原を代表する植物・ミズゴケが一部再生しているようすを観察。一体どうやってここに生えてきたのか？議論がまきおこりました。



※下歌才湿原は私有地が含まれるため、許可を得て入っています。